

個人レポート

ヤマトタケル―日本最古の美少年、相反する二面性―

福留 優樹 菜

はじめに

日本最古の英雄ヤマトタケルについては『古事記』『日本書紀』『風土記』に異なる伝説があり、彼は荒々しいエピソードや暴虐的で惨い振る舞いをする話が多く、男性的で猛々しいイメージが強い人物である。しかしながら、中にはその男性的なイメージを払拭させる意外な伝説が数多く存在し、悲劇の皇子というイメージも生じている。彼がどんな人物だったのかは出典によってかなり開きがあり、はつきりしないことがわかる。そんな謎多き人物ヤマトタケルの素顔に迫った。なお、ここでは彼の猛々しい話は大前提とし、挙げていない。また、『古事記』と『日本書紀』によるヤマトタケル説話は、大筋は同じであるが、全体的に大きな差がある。ここではより浪漫的要素が強く、主人公や父、天皇の間関係から来る悲劇性に彩られた、『古事記』を中心に述べている。

一 ヤマトタケルの人物像

そもそも、最初からヤマトタケルと名乗っていたわけではない。当時は今と違い、名を人格の一部と見て、本名を知れば呪詛なども自由にできると考えた時代である。景行天皇と后ハリマノイナビノオオイラツメから生まれた第三子（日本書紀では第二子）小碓命（オウスノ

ミコト）、彼がヤマトタケルその人である。景行天皇の皇子とは言え、八十人いる皇子のうちの一人にすぎない。双子として生まれてきたため、先に生まれてきた兄、大碓命と対の小碓命という名がつけられた。

またの名前を「日本童男、倭男具那（やまとおぐな）」と呼ばれる。「童男」とは「童女」の対で、未婚の男子、成人前の男子を指す。『倭名類聚抄』には、「童子未二結レ髪加一」「十歳前後者」とあるとしている。つまり、現代で言う「少年」に近い。

そんな彼が、ヤマトタケルと名乗るようになったのは、熊襲征伐の時のことであった。詳しくは後で述べる。父のためには言え、裏切った兄をばらばらにして殺してしまう気性の激しさ、そして戦の才ゆえに、実の父である景行天皇に恐れられ、遠征を命じることで父から遠ざけられるヤマトタケルは、熊襲を倒した後、イヅモタケルをも討伐し、尾張、相模、甲斐、信濃等数々の成功を収めるが、病の末、能褒野で倒れる。彼の魂は白鳥となって、帰りたいと強く願っていた倭へ飛んでいったとされている。

二 女装

一五、六歳の時に、父である景行天皇から熊襲を討てと命令が下った

ヤマトタケルは熊曾建（日本書紀にはトロシカヤ、川上梟師と表記）を征伐するために九州へと向かう。熊曾建征伐の時、思いもよらない戦術を用いる。唯一の叔母のヤマトヒメノミコトからもらった衣裳を使い、女装をして敵地に潜り込むのである。

この部分を『古事記』、『日本書紀』は次のように描いている。先に『古事記』について、次に『日本書紀』について述べる。

爾くして、小碓命、其の姨の倭比売命の御衣・御裳を給はりて剣を御懷に納れて、幸行しき。（中略）

爾くして、其の樂の日に臨みて、童女の髪之如く、其の結へる御髪を梳り垂れ、其の姨の御衣・御裳を服て、既に童女の姿と成り、女人の中に交り立ちて、其の室の内に入り坐しき。爾くして、熊曾建の兄弟二人、其の嬢子を見威でて、己が中に坐せて、盛りに遊びき。故、其の酣なる時に臨みて懷より剣を出し、熊曾が衣衿を取りて、剣を其の胸より刺し通しし時に、其の弟建、見畏みて逃げ出でき。乃ち、其の室の椅の本に追ひ至り、其の背の皮を取りて、剣を尻より刺し通しき。

（景行記）

（そして、その祝宴の日になると、小碓命は、少女の髪のように、額に結っていた髪を櫛けずって垂らし、叔母の衣裳を身につけて、すっかり少女の姿となって、女たちの中にまぎれこんで、その室の中に入っていってしまった。すると、熊曾建の兄弟二人は、その乙女を氣にいり、自分たちの間に座らせて、盛んに祝宴をしていた。そして、その宴のたけなわの時になって、小碓の命は懷から剣を出し、熊曾の衣の衿をつかんで、剣をその胸から刺し通した時に、その弟建は、見ておそれをなして逃げ出した。小碓命はすぐにこれを追いかけて、その室の梯子の下に至って、その背中^{（2）}の皮をつかんで、

剣を尻から刺し通した。）

仍りて剣を裯の裏に佩きたまひ、川上梟師が宴の室に入り、女の中に居します。川上梟師、其の童女の容姿を感じて、則ち手を携えて席を同にし、杯を挙げて飲まして戯弄す。（日本書紀）

（おとめの姿で、剣を衣の中にひそめ、川上梟師の酒宴の部屋に入り、女たちの中に紛れ込んでおられた。川上梟師はその童女の姿を賞し、手をとって同席させ、酒杯を上げて飲ませ戯れ遊んだ。）

熊襲征伐は右のように行われた。油断させて、接近するという作戦からの女装ではあるが、現地で思い立った奇策ではない。なぜなら出発前に叔母のヤマトヒメから「御衣・御裳」を借りるという、計画的なものであるからだ。また、髪を結うということは、先にも述べたが、ヤマトタケルが「男」ではなく「少年」と描かれているからであり、だからこそ童女に変装することができたのだ、と吉田修作氏は述べている^{（1）}。

そして、『日本書紀』の次の部分について注目したい。

川上梟師、其の童女の容姿を感じて、則ち手を携えて席を同にし杯を挙げて飲まして戯弄す。（景行記）

戯弄、弄ぶ、とはすなわち「いじる、まさぐる」という意味を持つ。この表記を言葉通りに捉えるなら、熊曾はこの綺麗な少女が少年だということに気付かなかった可能性が高く、それほどまでにヤマトタケルが見目麗しかったということを表している。この女装は、伊勢大神宮の齋宮であるヤマトヒメの靈威を借りようとしたのだらうとも言われている^{（2）}。

日本の歴史において、男性が女装をし、女性が男装をするといった行為自体は珍しい物ではない。天照大御神が男装をしてスサノヲと戦ったエピソードに始まり、源義経も女装をした一人であるし、歌舞伎の女形のように伝統芸能として今も残っているものもある。

外国の例では、ギリシャ神話のヘラクレスにも女装の話が見られる。その点も似ていると言え、ヤマトタケルはそうした中性的な姿形とは裏腹に、その後が続く彼の熊曾の殺し方はかなりむごいもので、先にも述べているが「其の室の椅の本に追ひ至り、其の背の皮を取りて、剣を尻より刺し通しき」とある。

この残虐性と、先の美少女姿という信じがたい対立構造が、彼の二面性を表しており、彼を印象付けていると『新編日本古典文学全集』の古事記の頭注にも述べている。

三 女性とヤマトタケル

一見、女性などと全く縁がなさそうなヤマトタケルだが、実際は女性が重要な役目を担っている。夫人も何人もいたようだが、詳細な記載があるのは叔母のヤマトヒメと、オトタチバナヒメ、ミヤズヒメの三人である。彼女たちが登場すると、途端に精彩を欠くヤマトタケルの話をそれぞれ挙げる。

I ヤマトヒメ

先ほども述べたように、ヤマトヒメはヤマトタケルの唯一の味方の叔母で、女装のための衣裳や、ヤマトタケルにゆかりのある草薙剣を授ける人物である。この叔母の庇護があるうちはヤマトタケルも安全で強く、危機も叔母の贈り物で乗り切るものの、叔母の庇護がなくなった途端に

弱体化していき、次に説明するミヤズヒメにこの剣を預けたために、命を落とすこととなる。

II ミヤズヒメ

尾張国の国造の娘である。ヤマトタケルは、ミヤズヒメと婚約をし、東国に向かい、戻ってきたときに結婚の約束をしていたミヤズヒメと結婚する。この東征の帰路、ミヤズヒメの許に立ち寄った時の話がある。

ここに倭建命が詔りたまひしき、「この山の神は徒手に直に取りてむ」とのりたまひて、その山に騰り給ふ時に、山の辺に白猪逢へり。その大きき牛の如くなり。ここに言挙げして詔りたまひしき、「この白猪になれるは、その神の使者にあらむ。今殺らずとも還らむ時に殺さむ」と詔りたまひて騰りましき。

この不用意なコトアゲによって、ヤマトタケルは命の危険にさらされる。そもそも事の発端はヤマトタケルが草薙剣をミヤズヒメの元に残してきたことから始まっているのだ。

III オトタチバナヒメ

ヤマトタケルが駿河に遠征し、相模から上総に向かう途中、何の前触れもなく登場する人物がオトタチバナヒメである。ヤマトタケルが言霊で、「是、小海のみ。立跳にも渡りつべし」と暴言を吐いたことにより、暴風が起こり、船が進めなくなってしまう。

今し風起こり浪泌くして、王船沈まむとす。是、必ず海神の心なり。

願はくは賤しき妾が身を以ちて、王の命にかけて海に入らむ。

ヤマトタケルの不用意な言葉が、海神を怒らせ、オトタチバナヒメを
入水させた。言い換えると、オトタチバナヒメがいなければヤマトタケ
ルはこの海で死んでいたかもしれないことになる。これらは全て女性に
纏わる話であり、ヤマトタケルの軽率な行動から、女性たち、そしてヤ
マトタケルは、共々危険な目に合っている。そんなヤマトタケルを助け
てくれるのはいつの時も、傍にいる女性なのである。

四 白鳥伝説

ヤマトタケルは故郷である倭に着く前に能褒野で死んだときに、魂が
白鳥になって倭へ飛んで行ったと言われている。

是に、八尋の白鳥と化り、天に翻りて、浜に向かひて飛び行きき。
爾くして、其の后と御子等と、其の小竹の刈杖に、足をきり破れ
ども、其の痛みを忘れて、哭き追ひき。
(日本書紀)

ヤマトタケルが死後、白鳥になって飛び去ったということで、その白
鳥は大和国の琴弾原に白鳥陵を作った。これが今の奈良県御所市高田に
ある白鳥陵である。白鳥はまた飛んで行って、河内の古市邑に留まりそ
こでも陵を作ったとされる。今の大阪府羽曳野市である。最後に白鳥は
天上に姿を消したことから陵には衣冠しか置いていないとされる。現代
人である私たちにはなじみにくい考えかもしれないが、古代人は飛ぶも
のに靈魂のやどりを見たとされている。特に白鳥は靈的な存在として見
ていたとされている。これを「鳥靈信仰」と呼ぶ。

この白鳥伝説はヤマトタケルを悲劇の英雄と言わしめることとなる有
名な話の一つである。更に言えば、そもそもヤマトタケルには白鳥にま
つわるエピソードが多い。宮城県にある刈田嶺神社がそうである。ヤマ
トタケルにゆかりのあることから、白鳥大明神と呼ばれている。しかし
『地名辞書』には、ヤマトタケルの伝説と刈田嶺神社は無関係としており、
ヤマトタケルとその神社にゆかりがあると言えるはつきりした証拠はな
いのだが、付近に住む、白石住民の信仰は熱狂的であったと言われる。

例えば、戌辰の役で、白石城主の片倉小十郎は出陣の際の旗指物に「日
本武尊」「白鳥大明神」という字を染め抜いた。これは、片倉小十郎が
白鳥信仰を信じていたからだろうと言われる。

また、文化九年、刈田郡一帯に大暴風があつた時、領主が誤って白鳥
を鉄砲で撃つたために、白鳥のたたりが起つたのだと人々が噂したと
いう。このように白鳥信仰は古代だけではなく、後世にも根付いている
のである。

ヤマトタケルに限らず、白鳥への思い入れは、多くの伝説を作ってい
る。そこには白鳥が持つ神秘的なイメージに人々が魅了されるというこ
とが大きな理由の一つであると考えられる。

五 まとめ

以上、これらのことから、ヤマトタケルは男性的な性質と女性的な性
質を兼ね備えていることがわかる。一見相反するこの二つの性格が、他
の英雄にはない魅力を引き出している。彼の荒々しさの陰に時折見られ
る優しさや、年相応さ、といった中性的な部分も見取ることができる。

また、英雄ではあり得ない行動の数々、破天荒な姿も多く見られる。
この二面性こそ、ヤマトタケルが理想の英雄像としてなり得ている点で

はないだろうか。日本人が圧倒的な英雄の存在を好まず、その人物に完璧でない部分や、人間臭さを暗に求めているのではないか。

一見相反するこの二面性が、完璧な英雄ではないヤマトタケルを、今日でも愛される人物にし続ける理由なのかもしれない。

註

(1) 吉田修作 童子論―ヤマトタケル・スサノヲ・桃太郎

福岡女学院大学紀要 (七卷 一九九七 二月)

(2) 瀧元誠樹 比較文化論叢 女装した武人倭建命と花郎の比較考察(十三卷 二〇〇四 三月三十一日)

(3) 高橋きわ 「白鳥伝説」の一考察―白鳥になったヤマトタケル 仙台白百合女子大学紀要

(五卷 二〇〇一 一月三十一日)

参考文献

『新編日本古典文学全集1 古事記』(小学館 一九九七)

『新編日本古典文学全集1 古事記』月報37 (一九九七 五月)

『新編日本古典文学全集2 日本書紀①』(小学館 一九九四)

谷川健一『白鳥伝説』(集英社 一九八六)

須永朝彦『美少年日本史』(国書刊行会 二〇〇二)

多ヶ谷有子『王と英雄の剣 アーサー王・ペーオウルフ・ヤマトタケル―古代中世文学にみる勲と志』(北星堂書店 二〇〇八)

武光誠『図解雑学 古事記と日本書紀』(ナツメ社 二〇〇八)

三橋順子『女装と日本人』(講談社現代新書 二〇〇八)

横山聡 悲劇の皇子の物語 ―ヤマトタケル説話の語るもの

武蔵野女子大学文学部紀要(二卷 二〇〇一 二月二十日)

吉井巖『ヤマトタケル』(學生社 一九七七)